



産休サンキュープロジェクト・ニュースレター

「ありがとう！」 ～支援で助かった命～

2017年11月号

Vol. 9



事業地ガルバチュウラ村の子どもたち

日本赤十字社(日赤)は2007年11月からケニア赤十字社(ケニア赤)を通じて、ケニア地域保健強化事業¹を実施しており、今年で10年目となります。

現在、ケニア赤と日赤間で協議を行ひ、事業終了に向けて準備を進めていますが、事業は様々な課題を抱えています。例えば、昨年8月から事業地のいくつかの村で武力衝突が起こり、依然として治安が安定せず、タナ村、クルクラ村、ベルゲシュ村では巡回診療等の活動が実施できない状態が続いています。また、ガファルサ村のボランティアグループの生計支援活動は農業を予定していましたが、長期的な干ばつの影響のため、農業の水源となるはずだったEwaso・Nyiro川が枯渇し、未だに活動が滞っています。

事業終了後も住民たちが最低限の必要な保健サービスを受けられるよう、どのように活動を移管していくか、日赤は現地保健省等の関係者を含め、ケニア赤との協議を続けていきます。



「産休サンキュープロジェクト」とは

ケニア赤十字社アッパーイースト地域支部長 タラソ チューチャさんからのメッセージ

私は、サンプル州、マラサビト州、イシオロ州の3州を管轄するケニア赤十字社(ケニア赤)アッパーイースト地域責任者のタラソ・チューチャと申します。

ケニア赤は2007年から日赤の支援で、母子保健の改善や妊産婦及び授乳中の女性や5歳未満児の子どもの死亡率の低下を目標にイシオロ州ガルバチュウラ県セリチョー地区とガルバチュウラ地区で地域保健強化事業を実施しています。本プロジェクトは、同地域に住む脆弱な女性や子どもたちに大きな影響と希望の光をもたらしました。

同地域の住民の多くは遊牧民です。彼らにとって深刻な課題のひとつは、保健サービスにアクセスできないことでした。この事業を通じて、地域で保健施設のない7村に巡回診療を実施し、この課題を解決することができました。

巡回診療のほかにも、栄養補給をしたり、地域保健システムを強化したりするなど、様々な支援をいただきました。また、ガルバチュウラ病院の手術室の建設や、それに伴う備品の購入といった保健施設のインフラ整備や、住民が健康問題に関心を持ち、自らのライフスタイルを見つめ直すような、行動変容を促す活動も支援していただきました。

私たちは、これらまでの継続的な支援に対して、日赤や日本の皆様へ、謝意を表します。



協議を終え、すっきりした表情のタラソ・チューチャ支部長と二星智恵子元要員(神戸赤十字病院看護師)

出産を機に、生まれたいのちと支えてくれる周囲の人に感謝し、日本で産休・育休を推進し、寄付によって 開発途上国の子どもとお母さんを支援し、一緒に子どもたちを育てていくプロジェクトです。

毎年4月・11月に発行されるニュースレターでは、ご支援いただいている事業報告のほか、親として共感できるような出産・育児の話、子どもを取り巻く保健リスク、日本での子育ての知識/子どものケガの手当と予防/疾病予防等を紹介していきます。

社内外のプロジェクト支援者への配布や、社内報等での啓発、あるいは御社・貴団体のCSR活動報告等にご活用ください。

*1 本事業は2007年11月に開始し、現在10年目を迎えています。
(フェーズⅠ:2007年11月～2012年12月、フェーズⅡ:2013年1月～2017年12月)

「現地のほっこり話やびっくり話」

～皆様からいただいたご質問・ご要望にお応えして～



夢は、地域に根付いた誤った慣習を改め、住民が健康な生活を送れるようになること

2010年からアシスタントプロジェクトオフィサーとしてケニア地域保健強化事業に携わるアデン・デンゲさん(58歳)。2年間赤十字ボランティアとして事業に関わり、その後、現在のポストに就きました。この度、日赤要員がアデンさんにインタビューをしました。



インタビューに熱く答えるアデン・デンゲ職員

IHOPに関わったきっかけは？

たまたまボランティアをやりたいと思い、ケニア赤十字社イシオロ支部を訪ねたところ、IHOPの事業が始まることだったんです。人は一人では生きられない、周りの人のおかげで生きている、そう常日ごろ思っていました。政府組織の事務職としての勤務経験と、保健分野でソーシャルワーカー経験もあったので、自分の経験や技術を地域住民に還元したいと思ったんです。

なぜ赤十字で働くことを選んだのですか？

ケニアの中では国民から最も尊敬されている人道組織だからです。事務総長以外はみんな「職員(employee)」で、職種・職階による区別がなく、実際にIDカードにもみんな「staff」と書かれています。

赤十字のどんなところが魅力ですか？

ボランティアの頃に感じたことですが、プロジェクトオフィサーが不在でも、会議に参加させてもらえたり、事務所を運営させてもらえました。ボランティアが、単に「ボランティア」として扱われるのではなく、ボランティアの意見も尊重されました。小さな事かもしれませんが、そういうことがモチベーションにつながるだけでなく、チームワークの醸成にもなります。

大変だったことは何ですか？

遊牧民には時間の感覚がない！太陽が昇るか沈むかで行動しているので、自分が担当している村人を管理することにも最初の1年はとても苦労しました。1年経って、ようやく村人に時間を守ってもらえるようになりましたよ。

夢は？

ガルバチュウラ地域に根付いている文化的なバリアをなくすことです。文化とはイスラム文化ではなく、ボラナ文化のことですよ。住民たちは、ボラナ文化の迷信を信じている・・・

迷信とは具体的に何ですか？

たとえば・・・

- 子供に注射をすると子どもが死んでしまう(予防接種の拒否)
- ポリオは悪魔であり、病気ではない(ポリオを発症しても、病院に行かない)
- 薬を探しにいくだけで、病気になる(薬を飲まない)
- 陣痛が始まったことを人に言うと、出産が遅れる(医療施設での出産の拒否)

今ガルバチュウラ県に必要なことは何ですか？

ガルバチュウラのような地域では生計支援活動^{*2}が必要です。教育を受けた子どもたちはきっと遊牧民にはならないでしょう。社会構造がどんどん変化しています。それゆえ社会構造の変化に合わせて、住民に対する生計支援活動を実施し、住民が自ら収入を創出し、経済的に自立した生活ができるよう支援してほしい。

最後に何か一言！

家族も私の仕事を誇りに思ってくれています。たとえ深夜に救急の対応で外出しなければならないときでも応援してくれています。これからもこの地域の住民のために、何か貢献できればと思っています。



アデン・デンゲ職員にインタビューをする日赤本社職員

*2 生計支援活動とは、事業終了後(日赤の支援がなくなった後)も、ボランティアが経済的に安定し、地域に根付いて保健活動を継続することを目標に、建築資材や電気屋などを営み収入を創出する活動です。日赤は、これらのお店を開くための初期費用の70%を支援しています。

産休サンキュープロジェクト 賛同企業からのメッセージ

木村情報技術株式会社 様



弊社では2015年度より「産休サンキュープロジェクト」に参加させていただいております。

参加のきっかけは社員からの提案でした。社員のお子さまが誕生した際には寄付をさせていただき、ご家族を招待し全社員が一同に集まる社内イベントでは、社員とその家族による募金の場を設け、社員とその家族のみなさまに募金をいただいております。募金の際には医療環境の整備された日本で生活ができていることに感謝しています。

また、弊社では社員のお子さまの出産後には朝礼で発表し、社内報にお子さまの元気な写真を掲載したり、社員一同で祝福したりしています。

元気に生まれてきたお子さまや、その周りの方々の喜びや幸せを皆で分かち合う気持ちを大切に、プロジェクトを通して、ひとりでも多くの赤ちゃんの笑顔を生み出す手助けができれば大変嬉しく思います。



社員旅行・忘年会では全社員が集まり家族が参加します。忘年会にお子さまと一緒に参加された写真です。

賛同企業(2017年11月現在)

住友商事株式会社
SCSK株式会社
ヤフー株式会社
木村情報技術株式会社
株式会社ローズマロウズ

賛同企業募集中です。多くの企業の皆さまのご協力お待ちしております。



帰国後の派遣要員の今

2015年1月～9月に事業管理要員としてケニアに派遣されていた京都第一赤十字病院看護師の近藤松子です。



任期満了して帰国してからは、赤十字の国際救援・開発協力要員としての経験を基に、看護学校や看護大学の学生、京都第一赤十字病院の職員、京都府看護協会の災害支援ナース、青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター^{*3}に参加する小・中・高校生を対象に、赤十字概論や災害看護論の講義を行っています。講義に参加した助産師たちから、

「妊産婦や子供の健康状態の改善を目指した活動報告を聞き、状況の厳しさを目の当たりにしました。住民の中から地域の保健ボランティアを育成し、住民を対象とした健康教育や集会を開催するというお話がありましたが、住民の健康に対する知識や意識を向上させ、住民自身が自分の健康を守れるようなシステムを作ることの大変さと重要性を認識しました。また、そのシステムが整うことにより、新生児や妊産婦が危機的な状況を回避することに繋がっているのだと思い、活動の重要性をとても感じました。」

「開発途上国では、プライマリーヘルスケア^{*4}を充実させるだけでも多くの命を救えるのだと改めて知ることができました。高度な医療技術を使わなくても、教育や予防接種で死亡率を下げるができるのだと思いました。」

といった感想を受けました。日本では当たり前の保健システムやプライマリーヘルスケアの重要性と、日本にいる私たちが当然のように受けられるサービスを受けられない人たちがいることを、これからも多くの後輩たち、周りの人たちに伝えていきたいと思っています。



事業地で放送されるイシオRFMのラジオ放送でスワヒリ語を使って事業紹介をする近藤松子看護師

*3 青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター(LTC)とは、児童・生徒を対象に、学校や地域社会のなかでのリーダーを養成することを目的に開催する宿泊研修です。このLTCでは「気づき」「考え」「実行する」態度を学ぶとともに、「赤十字」「国際理解」「福祉」「救急法」などについて、講義・体験・実習を通して知識や技術を習得することができます。また、そうした学習活動を通して、児童・生徒が自主性や協調性、リーダーの資質を学ぶことを期待しています。

*4 プライマリーヘルスケアとは、健康は誰もが享受できる権利であることを明言した1978年のアルマ・マタ宣言で掲げられた8つの基本行動(健康教育、安全な水の確保、予防接種奨励を含む母子保健推進、風土病対策、必須医療品の供給、コミュニティ保健ワーカーの活用、一般的疾患への対策、栄養改善)を指す。これらは廉価で、貧困地域でも全ての住民が健康であるために最低限必要な活動と位置づけられている。(JICA webサイト「<https://www.jica.go.jp/project/sudan/010/index.html>」から引用)

「三つ子のハミガキ百まで?!」

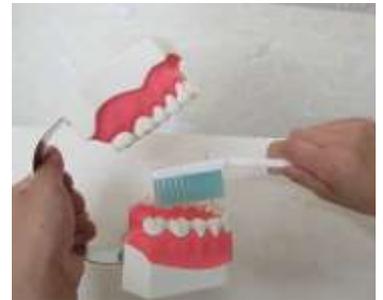
～日本での子育ての知識／子どものケガの手当／疾病予防のご紹介



8020(ハチマルニマル)運動をご存じでしょうか。これは、「80歳になっても20本以上自分の歯を保とう」という運動です。一生にわたって自分の歯で食べる楽しみを味わえるようにしましょうという願いが込められています。

健康な歯を保つために一番大切になるのは、やっぱり**ハミガキ**！

歯が生えていない0歳児には、母乳(ミルク)を飲んだ後に湯冷まし、離乳食を食べた後にはお茶を飲ませることで、口腔内の清潔を保つようにします。武蔵野赤十字保育園では、3歳児を対象に「**ハミガキ集会**」を行っています。



<こんにちはの持ち方>

前歯や下の歯のかみ合わせなどを磨くときは、歯ブラシの毛先を自分の方に向けます。

ハミガキ集会では看護師がパネルシアターを使って、むし歯の原因や**ハミガキ**の大切さをお話します。シアターの主人公「ひろし君」は、キャンディやチョコレートを食べた後、**ハミガキ**をせずに寝てしまったために、むし歯になり、その痛みで泣いてしまうのですが、その後しっかり**ハミガキ**をするようになった物語です。この物語を通じて、子どもたちに**ハミガキ**の大切さを知ってもらいます。3歳の園児たちは、「ひろし君」の行動を、じっと見て聞いていました。

ハミガキの大切さがわかったところで、実際に歯ブラシを持ってみがき方の練習をします。歯ブラシの持ち方には、「**こんにちはの持ち方**」と「**さようならの持ち方**」の2通りがあります。「**こんにちはの持ち方**」と「**さようならの持ち方**」は、手の中で歯ブラシを回転させるという行為をしなければならないのですが、園児たちはとても上手に持ちかえていました。**こんにちはの持ち方**で、左下の奥歯と右下の奥歯、**さようならの持ち方**で右上の奥歯と左上の奥歯というようにして、次々と全体を磨いていきます。



<さようならの持ち方>

上の歯の裏側や上のかみ合わせなどを磨くときは、歯ブラシの毛先を自分の方ではない方に向けます。



武蔵野赤十字保育園での「ハミガキ集会」の様子

正しい**ハミガキ**を知り、それを習慣にすることは、その後の人生に大きく影響していきます。「三つ子の魂百まで」といわれるように、「三つ子の**ハミガキ百まで**」とも覚えておいていただきたいと思います。

【情報提供: 日本赤十字社 東京都支部、武蔵野赤十字保育園】

日本赤十字社東京都支部では、子どもの成長・発達と病気や事故予防に関する講習を行っています。お子様同伴で受講していただける2時間ほどの短期講習などもございます。詳しくはホームページをご覧ください。

★「赤十字WEB CROSS電子講習室」をご活用ください。日赤WEBCROSSで検索するか、こちらのQRコードから開いてください(スマホ対応)。



東京 赤十字

検索

産休サンキュープロジェクトに関するご意見・ご要望をお寄せください。特に、ニュースレターの内容については、参加企業・団体の皆様とのコミュニケーションツールとなりますので、ご提供いただける情報、どのような情報がお知りになりたいか、素朴な疑問からご感想まで、是非、皆様の声をお聞かせください。

また、ニュースレターのデータ配信をご希望される方もこちらまでご連絡ください。

日本赤十字社 国際部 開発協力課 産休サンキュープロジェクト担当

電話: 03-3437-7089

Eメール: sankyuthankyou@jrc.or.jp

